

## 研究ノート

看護教育における病院実習に関する  
研究の動向分析と今後の課題千田 美紀子<sup>1)</sup>、米田 照美<sup>2)</sup>、清水 房枝<sup>2)</sup>、伊丹 君和<sup>2)</sup><sup>1)</sup> 滋賀県立大学大学院人間看護学研究科 人間看護学専攻修士課程<sup>2)</sup> 滋賀県立大学 人間看護学部

**背景** 看護教育における病院実習は、学生がさまざまな患者と直接触れ合い、多くの看護実践を経験する学びの場となる。医療の高度化・複雑化により、あらゆるニーズを持った人々に対応していくために、看護職にはこれまで以上に高い能力が求められ、看護実践能力の強化が求められている。看護実践能力を培うに実習は極めて重要であるが、実習施設が変わり学生が適応するのに時間を要し十分学習することが困難であること、学生が実践できる技術が限られていることなど、学生にとって充実した実習ができる環境とは言い難い。

**目的** 看護教育における病院実習に関する研究の中で、学生を指導する立場である「指導者」と「教員」に焦点をあて、先行研究について文献レビューを行い、今後の病院実習に関する研究の方向性を検討する。

**方法** 医学中央雑誌（web版version 5）で検索可能な1982年～2012年までの文献の中から、「臨床実習」and「病院」and「指導者」and「教員」の組み合わせで検索した。年代別に分類した後、内容別に帰納的に分類・検討し、今後の研究課題を展望した。

**結果** 1) 抽出された文献は182件であった。文献数は、2001年から徐々に増加していた。  
2) 分析対象とした107件の論文について内容別に分類した結果、(1)指導(2)評価(3)技術(4)学び(5)関わり(6)思いの6項目に分類でき、項目別に内容検討を行った。  
3) (1)から(6)について内容検討した結果、学生がよりよい環境で病院実習を行うためには、教員と指導者の連携が不可欠であることが示唆された。しかし、連携の具体的内容について研究されている論文は検索できず、長期的視点から実習指導体制ガイドラインを確立するための研究を行っていく必要がある。

**結論** 教員と指導者との連携の具体的内容について研究されている論文は検索できず、病院実習に関する今後の研究課題は、両者の実習における連携について具体化し、長期的視点から実習指導体制ガイドラインを確立していくことである。

**キーワード** 看護教育、病院実習、指導者、教員、文献レビュー

## I. 緒言

看護教育における病院実習は、学生がさまざまな患者と直接触れ合い、多くの看護実践を経験する学びの場となる。客観的・論理的に説明できないこの「経験」が、人間関係を基盤とする看護では重要な意味を持つことが多い<sup>1)</sup>。このような病院実習での経験は看護を専門職として確立する上で意義は大きい。また、学生の実習で得られる学びや充実感は大きく、看護への興味・関心につながると考える。

一方、医療の高度化・複雑化により、あらゆるニーズ

Studies on training in hospital of nursing education  
-trends and problems-

Mikiko Senda<sup>1)</sup>, Terumi Yoneda<sup>2)</sup>, Fusae Shimizu<sup>2)</sup>,  
Kimiwa Itami<sup>2)</sup>

2012年9月30日受付、2013年1月9日受理

連絡先：千田美紀子

滋賀県立大学人間看護学部

住所：彦根市八坂町2500

e-mail : k-itami@nurse.usp.ac.jp

を持った人々が看護の対象となっている。そのニーズに対応していくため、看護職はこれまで以上に高い能力が求められ、卒業時における看護実践能力の強化が求められている。臨地実習は、そのような看護実践能力を培うために、学内で学んだ知識と技術を統合し実践する重要な授業過程といえる。

しかし近年、看護系大学の急増等に伴い実習施設の確保が困難であることや、附属病院を持たない教育機関では領域によって実習施設が変わり学生が適応するのに時間を要し十分学習することが困難であること、患者の権利擁護のため実習中に学生が実践できる技術に限られている<sup>2)</sup>ことなど、学生にとって充実した実習ができる環境とは言い難い。

またその他の課題として、大学側では実習前学習の不確かさ、教員の指導能力・教員数の不足などがあり、病院側においても、患者構成の変容や現場の多忙さ、リスクマネジメント上の課題、実習指導者不足などが挙げられる。

実習の最終責任は教員にあり、教員は学生の行動と学習状況を把握し、教育的配慮に焦点をあてて指導を行う。これに対して、実習指導者は対象者のケアに責任を持ち、対象者に焦点をあてた立場で学生指導にあたる。病院実習における指導体制を確立するためには、両者の実習における指導のあり方が重要と考える。

そこで今回、看護教育における病院実習に関する研究の中で、学生を指導する立場である「指導者」と「教員」に焦点をあて、先行研究の文献レビューを行い、今後の病院実習に関する研究の方向性を検討する。

## II. 研究方法

### 1) 研究対象

医学中央雑誌（web版version 5）で検索可能な1982年～2012年までの文献の中から、「臨床実習」and「病院」and「指導者」and「教員」の組み合わせで検索を行った。

### 2) 分析方法

抽出された182件の文献を、発行年、論文の種類により分類した。そのうち、論文種類を「原著」、分類を「看護」に限定した107件の文献について、シソーラスやテーマ、目的から内容別に帰納的に分類・検討し、病院実習に関する研究内容からみえる今後の研究課題を展望した。

## III. 研究結果および考察

### 1) 年代別総数と原著論文数の推移

「臨床実習」「病院」「指導者」「教員」に関する研究は、原著論文の有無に関わらず2000年まで殆どみられていない（図1）。1994年には7件の研究が検索されたが、これは看護雑誌による「臨床実習指導者の直面している問題とその支援策」の特集であり、今回の考察からは除外する。

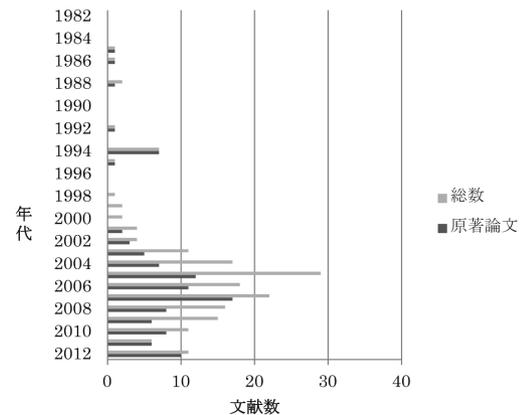


図1 「臨床実習」and「病院」and「指導者」and「教員」の文献件数の推移（n=182）

1985年にみられた原著論文では、指導者と教員との役割について研究が行われていた<sup>3)</sup>が、それ以降2000年までの研究では、学校側や指導者による指導の評価や振り返りが殆どであり<sup>4)</sup>、学生を対象とした研究<sup>5)</sup>はみられていない。

2001年から病院実習に関する研究総数、原著論文数ともに増加がみられている。特に、学生と指導者など2者以上を対象とする研究<sup>6)</sup>や、実習の教育内容を評価・検討する研究<sup>7)</sup>などが多くみられていた。学生への指導効果を検討する研究も増加しており、この要因としては、1992年から施行された「ゆとり教育」の影響とも考えられる。増加している学生の多様化に対応するために、指導者と教員が共に学生への関わりを考え、学生個々に対応する必要性が高まっていると考える。また、病院実習の教育内容について評価・検討する研究もみられているが、1997年に施行されたカリキュラム改正により、実践の科学として看護学を確立していくための実習のあり方を検討していく必要性が高まっていることが背景にあると考えられる。

また、今回検索した文献総数182件中に占める原著論文の割合は107件（59%）となっており、半数近くは会議録や解説、報告であることが確認された。病院実習に

おける評価はなされているが、教員側と指導者側の2者間のみで内容を共有するのみに留まり、研究として新たな知見や理論を示す論文に仕上げるというところまで至らなかったのではないかと考えられる。

2) 内容別に分類した研究の動向

今回分析対象とした看護の原著論文107件について、シソーラスやテーマ、目的から、内容別に分類した結果、6項目に分類できた(表1)。以下に、その内容別に分類した研究の動向について示す。

表1 研究の内容と年代別文献数 (n=107)

年代	指導	評価	技術	学び	関わり	思い			その他
						学生	指導者	教員	
2012年	2	1			1	2	1	1	
2011年	3				1	2	1		
2010年	1	2		1	1		1	2	
2009年	2	1	1			2			
2008年	1	2	2	1		1	1		
2007年	3	4	3	1		2	4		
2006年	4	1			1	2	3		
2005年	2	3	2	1	1	1	2		
2004年	2		1		1	1	2		
2003年		1	1	1		1		1	
2002年	1	1					1		
2001年	1					1			
2000年									
1999年									
1998年									
1997年									
1996年									
1995年							1		
1994年							7		
1993年									
1992年以前	3							1	
合計文献数	25	16	10	5	4	12	27	3	5

(1) 指導

指導に関する研究は25件みられ、「思い」に関する研究に次いで多い文献数であった。2007年の榎元ら<sup>8)</sup>の研究では、指導者が学内の模擬患者演習に参加した感想の分析結果として、学生を知る、後輩育成としての役割の自覚、指導方法の再考と改善への意欲、技術習得のプロセスを知る、看護とは何かを考えるというカテゴリーが抽出されている。学内演習は、講義より実践に近く、知識の統合や技術の習得するために重要な授業過程である。その学内演習に指導者が参加することは、学生を知る機会となり、学生のレディネスを共有する上で効果的と考えられる。

また、古谷ら(2011)<sup>9)</sup>は、学生の主体性を育成するための直接的な指導は、質問攻めにしない、褒める、ありがとと伝えることであり、間接的な指導は学生のレディネスの把握、指導者の中でレディネスを共有するなどの方法であったと述べている。今後、学生の主体性を可視化し、情報共有により教員・指導者が連携することの重要性が示唆されている。教員は学生の実習目標達成に責任を持ち、指導者は患者の安全に責任を持つという立場の違いから、両者の実習指導における役割は異なるが、

学生に対する効果的な実習指導のあり方や体制について両者の立場から検討していく必要があると考える。

一方、芦刈ら(2004)<sup>10)</sup>の研究では、実習指導者コース受講者の意識について調査しており、受講後は指導者としての自覚が高まりそれが行動レベルに変化を与えたと述べている。森ら(2005)<sup>11)</sup>の研究では、教育側と臨地側の合同による臨床指導者研修会の意義を検討し、研修後に指導者は学生指導に対する意識が前向きな姿勢へと変化したこと、教員・指導者両者の共通指導方針として学生とともに成長するということが見出された。松木ら(2006)<sup>12)</sup>は、教員・臨地実習指導者合同学習会において、参加者は「学生への関わり方」「自己啓発」「連携意識と連帯感」「望ましい指導者像」「実習指導力の向上への意欲」という学びがあり、参加者のその後の行動変容につながったと述べている。石垣ら(2006)<sup>13)</sup>は、指導者を対象とした教員側と指導者側の連携のもとに実施した研修会は、実習指導における学生の理解と関心を高めることができたとして述べている。このように、教員と指導者が合同で研修会をすることにより、実習目的・目標の共有、両者の理解、学生の理解につながり、連携意識と連帯感が高まるとともに実習指導への意欲向上にもつながると考えられる。

2012年に松谷ら<sup>14)</sup>は、1年目の看護師を対象とした新人看護師が必要としている実践能力について調査を行っている。その結果、看護実践能力を強化するためには、学生の主体的な学習を促進する教材の開発、臨地状況に近い工夫を凝らした演習、コンテキストを学ぶ臨地実習の積み重ねが必要であることが示された。同年中山ら<sup>15)</sup>により、看護基礎教育から新人研修および継続教育によって育成できる実践能力について内容検討が行われている。超高齢社会のなか、益々看護師の実践能力向上が求められる現在、看護基礎教育から、新人教育、継続教育という長期的な視点で、看護実践能力を育成するガイドラインの確立は不可欠である。

また、実習の最終責任は教員にあり、教員は学生の行動と学習状況を把握し、教育的配慮に焦点をあてて指導を行う。これに対して、実習指導者は対象者のケアに責任を持ち、対象者に焦点をあてた立場で学生指導にあたる。病院実習における指導体制を確立するためには、両者の実習における指導のあり方が重要と考える。したがって、教員と指導者の連携、環境条件の整備は極めて重要な課題といえる。

(2) 評価

評価に関する研究は16件みられた。16件のうち、8件は実習目標に対する評価の研究であり、残り8件は指導者や教員の指導に対する評価であった。

実習目標に対する評価の研究では、学生自身の自己評

価を分析したもの<sup>16,17)</sup>、学生の自己評価と指導者・教員による評価を総合して分析したもの<sup>18)</sup>がみられた。学生と指導者の評価はほぼ一致するが、有意差が出る項目もあることが認められており、評価方法の見直しが必要であること、指導内容を指導者間、指導者・教員間で統一することの必要性が示唆されている。

また、指導内容について飯室ら<sup>19)</sup>は、実習初年度と2年目を比較検討し、初年度の結果をもとに、2年目に指導者と教員が連携を図りながら実施した結果、評価の十数項目で有意な上昇がみられたと述べている。学生側のみでなく指導する側も含め、両者の視点から実習や指導を評価することにより、評価の認識や思い・考えの違いの有無を明らかにするとともに、今後の病院実習における指導に対する評価について検討していく必要があると考える。

### (3) 技術

技術に関する研究と分類できたものは、10件であった。グレッグら(2005)<sup>20)</sup>は、臨地実習における学生の看護技術の習得状況に対する指導者および教員の評価から、卒業時まで習得すべき技術内容を整理する研究を行っている。2007年に和田ら<sup>21)</sup>は、看護学校における技術の教育実施状況にはばらつきがみられ、卒業時到達状況は指導者側が「単独でできる」技術に対する期待度が高かったとしている。これは、文部科学省で開かれた「看護教育の在り方に関する検討会」(2002)において看護技術学習項目が明記され、技術修得を重視した教育になっていることが関係していると考えられる。しかし、高度化する医療技術のなかでの病院実習において、患者の権利擁護の考えのもとに看護学生が実践できる技術は限られている。特に、身体に侵襲のある看護技術は実習ではほぼ実施できないため、病院実習で学べる技術と学内で習得する技術、継続教育において培う技術や実践能力について検討していく必要がある。

一方、病院実習前に学内で行う技術チェックや技術演習に指導者が参加することにより、学生側は学習への動機づけ、指導者側は学生のレディネスを理解する場となり、実習における指導方法を検討する機会になるといわれている<sup>22,23,24)</sup>。しかし、金子ら<sup>25)</sup>は学内で行われる学生の技術演習における指導者と教員の評価の違いを比較検討しており、指導者は、実習に対応できる技術という視点で、教員は基礎的知識・技術・思考の習得度という視点で評価していることが明らかとなった。指導者が学内演習に参加することは、両者にとって利点があるが、看護技術の評価については指導者・教員が共に独自の視点で行っていると考えられる。両者が同じ視点から評価ができるように協議し合い、同じ目標に向かって実習指導できるよう調整していくことが必要であると考えられる。

### (4) 学び

学びに関する研究は6件であった。2003年に安藤ら<sup>6)</sup>は指導者への介入を行っている。「共に学ぶ」ことの意義やその方法を説明する介入を行った結果、学生が困っていることを確認しながらその方向性を示そうとすることは、学生に安心感与え、主体性が発揮できたと述べている。表ら(2005)<sup>26)</sup>の研究では、カンファレンスは経験できなかったことについても学びが深められるため、そのような場の提供ができるような指導者の役割が必要であることを述べている。また、2007年川上ら<sup>27)</sup>の研究では、レポートによる学びの分析を行い、学生は教員と指導者のサポートによって不安や困難さが軽減され、課題としているレポートを通して経験の意味づけを行い、学びが深化していることを明らかにしている。また、2008年奥田ら<sup>28)</sup>も、学生のレポート分析から、学生が学んだことを指導者や教員が意味づけることが課題であると述べている。

学生が学びを深めていくためには、カンファレンスやレポートなどを活用していくことが重要であるが、教員と指導者の関わりによって実習での経験を意味づけていくことで、より学びが深まると考えられる。そのためには、教員と指導者が学生への関わり方を共に考え、実習指導力を向上させていくことが必要である。

### (5) 関わり

関わりに関する研究は4件であった。ここでの関わりは、教員や指導者の学生に対する接し方・指導に焦点をあてている。2004年に宮長ら<sup>29)</sup>は、学生が看護観を育むことができた事例を振り返り、指導者・教員は学生のつまづきや不安に早期に気づき、アドバイスをしていくことが重要であることや、適切な時期での助言、両者の協力は学生の実習での達成感により影響を与え、学生の倫理的感性を育てていく上で重要であることを示している。鈴木ら(2005)<sup>30)</sup>の研究では、指導者は学生のことを考えた言動に努めていたが、優先順位により業務優先の言動もあることが認められた。2012年は、学生の病院実習における経験を成功体験につなげるための指導者の関わりについて研究が行われている。ケア実施中の関わりとして指導者がモデルになる、学生主体、安全の保証、患者と学生の雰囲気づくり、個別性を理解してほしい思いが抽出された<sup>31)</sup>。

以上のように、教員と指導者の関わりでは、学生の実習における達成感や看護観の育成に影響することが示唆されている。学生の個別性に配慮し、学生主体の実習ができるよう教員と指導者が共に関わっていくことが重要と考える。

## (6) 思い

思いに関する研究は、42件であり最も多い内容であった。そのうち、学生に関するものが12件、指導者に関するものが27件、教員に関するものが3件であった。

### ①学生への思いに関する研究

2001年石田ら<sup>32)</sup>により、学生の実習前後の不安・緊張の意識調査が行われている。その後2003年には、痴呆患者の看護における困難感を分析し、それを軽減するためには自己を振り返り、患者をあるがままに受け入れることが重要であり、実習での困難感を軽減するためには、教員と指導者の役割は非常に大きいと述べている<sup>33)</sup>。また、嶋田ら(2007)<sup>34)</sup>の研究では、認知症特有の症状に学生は困難感を感じており、指導者と教員が学生と共に振り返りを行い、認知症高齢者の行動を意味づけできるような教育的関わりが効果的であったことが示唆されている。核家族が増加しているなか、学生は普段の生活で高齢者と関わるのが少ないという背景の中で、実習で初めて接する認知症患者の症状にどう対応すべきか困難に感じることも多い。しかし、入院患者は年々高齢化しており、その対象を理解した上で看護していく必要がある。実習中に学生が困っている時に、教員と指導者は学生と共に振り返り意味づけを行っていくことによって、学生の理解が深まると考えられ、両者の役割はきわめて重要といえる。

2007年矢野ら<sup>35)</sup>は、実習における新しい経験や気づきからの学びが達成感・満足感に繋がっていると述べている。竹内ら(2010)<sup>36)</sup>は、実習満足感と自己効力感との関連性を分析しており、満足感の高い学生は自己効力感も高いことが明らかとなった。また、「指導者と教員との連携が上手くとれ双方の意見の食い違いがなかった」の項目と自己効力感には強い相関関係がみられたと述べている。実習満足度を上げるためには、自己効力感が効果的に働くよう学生と教員・指導者との関係が重要である。

### ②指導者の思いに関する研究

指導者の思いに関する研究は、指導上の困難なことに焦点を置き、それを分析している研究が多くみられた。江原ら(2006)<sup>37)</sup>の研究では、指導者には教育側からの役割への期待やそれを果たそうとする重圧・責任感があり、教育側の指導方針の把握が不十分なことを自分の未熟さと捉え問題提起しにくかった可能性が高いことを示している。その結果として、指導者の意見交換の場では、各々の悩みや葛藤が表現できず、自分自身の内に抱え込んでいたことが述べられていた。石崎ら(2008)<sup>38)</sup>は、指導者が抱えている指導上困っていることとその要因を検討している。その結果、指導者が実習において困っていることは指導体制に関することが最も多く、専任でないため指導が不十分、スタッフの協力が得られない、計画やレポートを見る時間が不足していることが挙げられていた。

指導者自身に関することは、指導者として自信がない、学生に合わせた指導方法に困難を感じているなどであり、教員との関係では、連携が不足していることが挙げられている。2012年原田ら<sup>39)</sup>の研究では、指導者のとまどいとして、看護を育み指導することの難しさ、学生を育成する実習環境の整備不足、今時の大学生の気質が抽出されている。指導者が教員と連携がとれるように支援する必要がある、臨地と大学が相互交流を行うことで、指導者と教員・学生が互いを理解し、教育効果を高めることにつながることを示唆されている。同年山根ら<sup>40)</sup>は、指導者の学生の実習に対する姿勢への不満と危惧、教育側の教育方針・指導体制への不満、スタッフ間の意識の差がある状況が「多忙な業務の中での学生指導の負担感」と結びつき、満足のいく指導ができない不全感になっている。その結果、「指導者とスタッフの連携の必要性」「教員との連携の必要性」を感じており、それが課題となっていると述べている。2004年に佐藤ら<sup>41)</sup>は、教員と指導者が連携していくためには、教員は積極的に実習指導に参加し教育観や学習者観を話し合い共有していくこと、指導者の自己評価を高められるようサポートし課題を共に考えることが必要であることが示されている。

以上のように、指導者を実習指導専任としておけない臨地の多忙さ、各教育側の教育方針の違いにより実習内容の把握が困難であることなどが指導者自身の負担となり、困難を感じながら指導を行っている現状が推測できた。その背景には教員との連携不足が挙げられており、今後の課題として指導者のサポート体制を確立し、互いの指導観や教育観を話し合えるよう連携していく必要性があると考えられる。

2005年金子ら<sup>42)</sup>は、日常業務と指導者業務との兼務で負担度が高い指導者は指導に対する関心度が低く、指導に対する学生の変化にやりがいを感じている指導者は関心度に加えて自信度も高いことを明らかにした。また、井上ら(2011)<sup>43)</sup>は、指導者が指導上大切にしていることについて調査しており、学生が主体的に学ぶよう支援する、学生を否定せず意欲を引き出すよう関わる、学生が看護や看護師に誇りや自信をもてるよう関わるなどのカテゴリーが抽出された。指導上課題と感じていることについては十分な指導が行えるような体制の整備、病棟全体での教育の質の確保、学生の実習への準備性に関する教員・教育機関との検討などが抽出されたと述べている。また、箕輪(2009)<sup>44)</sup>の研究では、病院実習を受け入れる指導者の「知りたい」情報ニーズを調査している。30～40歳代の指導者は、若者への接し方と自分たちが学んだ頃とは変化した現在の看護学教育についての情報ニーズを持っており、専門学校と大学を受け入れる指導者は、専門学校と大学を比較した学生と教育の特徴についての情報ニーズを持っていた。それぞれの情報ニーズが異なる

るため、個々の指導者のニーズを踏まえた連携が必要である。

### ③教員の思いに関する研究

山田ら(2010)<sup>45)</sup>は、看護教員が期待する臨地実習指導者の役割を明らかにすることを目的にフォーカスグループインタビューを行っている。「実習指導準備」「実習環境の整備」「学生の学習意欲への支援」「病棟スタッフとの連携」「教員との連携」がカテゴリーとして抽出されており、教育側と臨地側とが連携して指導をしていく必要性が示唆されている。2011年には、新人看護教員の困っていることの実態が調査され、実習では指導に対する不安や、指導者と教員との連携に困難を感じていることが明らかとなっている<sup>46)</sup>。2012年井ノ上ら<sup>47)</sup>により、実習調整者の役割について検討されている。教員は、指導者との連携が不十分であると考えている。しかし、先行研究ではその必要性は示唆されているものの、具体的にどのように連携していくことが望ましいのかという連携の具体的内容を研究している論文は検索できなかった。

### 3) 病院実習に関する研究の動向分析からみた今後の研究課題の展望

臨地では、病棟業務と兼任ではなく実習指導専任の指導者を置くことが望ましいといわれているが、業務の関係上それが困難なところも多い。また、教員も学内での講義などによって積極的に実習参加することが困難であることが現状での課題である。学生が看護実践能力を培い、学内で学んだ知識と技術を統合し実践するためには、実習環境を調整していくことや、指導体制を確立していくこと、個々の学生に応じた指導を行う必要があると考えられる。今回検索した研究の多くは、学生の主体性を尊重した指導を行えるよう指導者と教員の連携が必要であることが示唆されており、実習前後に合同指導者研修会を行う、指導者が学内演習に参加するなどが連携の一貫として行われている。研修会や学内演習の参加者は、学生の理解や指導への自信につながったと肯定的な意見が多いが、今回検索できた多くの研究では、指導者・教員ともに現在の連携では連携不足であると結論づけているものが多くみられた。連携の具体的内容について研究されている論文は検索できなかった。研究の結果として教員と指導者の連携が不可欠であることが見出され、その具体策については今後の課題であるということが示されたのみである。また、教員と指導者の「知りたい」情報ニーズの違いにより、連携の内容は異なるといわれており、個々の指導者のニーズを踏まえた連携の方法と内容を両者が共に後輩を育成するという長期的な視点から検討していく必要がある。

以上から、今後教育側と臨地側がどのように連携していけば看護学生がよりよい環境で病院実習ができるのか、

両者の実習における連携について具体化し、長期的視点から実習指導体制ガイドラインを確立するための研究を行っていく必要があると考えられる。

## IV. 考 察

- 1) 病院実習に関する研究の中で、「指導者」と「教員」に焦点をあてた研究は2001年より増加傾向にある。
- 2) 分析対象とした研究をシソーラスやテーマ等を参考に、内容別に分類したところ、指導、評価、技術、学び、関わり、思いの6項目に分類できた。
- 3) 指導者と教員の実習指導における役割は異なるが、学生にとって効果的な病院実習ができるように両者が連携していく必要がある。しかし、現在の連携では連携不足であると結論づけている研究が多くみられた。
- 4) 教員と指導者との連携の具体的内容について研究されている論文は検索できず、両者の実習における連携について具体化し、長期的視点から実習指導体制ガイドラインを確立していくことが今後の研究課題である。

## 文 献

- 1) 藤岡完治, 尾宜譜美子: 看護教員と臨地実習指導者, 医学書院, 87, 2004.
- 2) 文部科学省 大学における看護系人材養成の在り方に関する検討会: 大学における看護系人材養成の在り方に関する検討会 第一次報告(平成21年8月18日)
- 3) 北川志のぶ: 臨地実習における専任教員と臨床指導者の役割, 看護教育の研究, 3, 27-35, 1985.
- 4) 桐淵リツ子: 新カリキュラム下の臨床実習 臨床実習展開上の諸問題と対応 学校側・臨床側の連携と実習指導要綱づくり 教員と臨床実習指導者の連携・協力体制 臨床実習指導者側から, 看護展望, 17(2), 142-145, 1992.
- 5) 石田清美, 久保木三喜子, 河合節子, 他: 基礎看護学II期実習前, 実習後の不安・緊張への意識調査 アンケートをとおして意識の変化をみる, 旭中央病院医報, 23(1), 1-13, 2001.
- 6) 安藤高子, 森千鶴: 臨地実習において学生と『共に学ぶ』ことを再確認した臨地実習指導者の変化, 日本看護学会論文集 看護教育, 34, 177-179, 2003.
- 7) 清水妙子, 河原田榮子: 周手術期看護実習における看護診断を取り入れた看護過程の評価, 看護教員と実習指導者, 1(5), 116-123, 2005.
- 8) 榎元康世, 富岡由美, 三田村友美, 他: 臨床指導者が学内技術演習に参加することの意味 ユニフィケーション活動をとおして, 日本看護学会論文集 看護

- 教育, 37, 191-193, 2007.
- 9) 古谷剛, 石光美美子, 小澤麻美, 他: 臨床実習指導者が捉える「学生の主体性」に関する基礎的研究, 目白大学健康科学研究, 4, 77-82, 2011.
  - 10) 芦刈智美, 石山ひろみ: 臨地実習指導者の意識の向上をめざして 実習指導振り返り表を利用して, 九州国立看護教育紀要, 7(1), 20-26, 2004.
  - 11) 森麻美, 問可優子, 植田美鈴, 他: 看護専門学校と臨地実習3施設合同による臨床指導者研修会の意義, 日本看護学会論文集 看護教育, 35, 136-138, 2005.
  - 12) 松木和子, 三浦文子, 八木直子, 他: 教員・臨床実習指導者合同学習会の成果 プロセスレコードを用いた事例検討会からの学び, 日本看護学会論文集 看護管理, 36, 424-426, 2006.
  - 13) 石垣富士子, 蕨越直美, 公立能登総合病院臨床実習指導者委員会: 臨地実習指導者の教育対策を考える, 公立能登総合病院医療雑誌, 17, 13-15, 2006.
  - 14) 松谷美和子, 佐居由美, 奥裕美, 他: 看護系大学新卒看護師が必要と認識している臨床看護実践能力 1年目看護師への面接調査の分析, 聖路加看護学会誌, 16(1), 9-19, 2012.
  - 15) 中山洋子, 横田素美: 看護基礎教育から継続教育における看護実践能力の育成内容, 福島県立医科大学看護学部紀要, 14, 1-11, 2012.
  - 16) 菅谷千恵子, 駒田眞美, 河合節子, 他: 小児看護学実習に対する学生の授業(実習)評価, 旭中央病院医報, 31, 4-6, 2009.
  - 17) 久保園剛, 吉村晶幸, 下野義弘, 他: 精神看護学実習における看護学生の実習過程の評価「授業過程評価スケール 看護学実習用」による分析, 日本看護精神科看護学会誌, 51(2), 101-105, 2008.
  - 18) 片山陽子, 山内香織: 在宅看護実習における指導・評価の検討(第1報), 看護教育の研究, 19, 77-79, 2003.
  - 19) 飯室敦子, 横島啓子, 岡田さとみ, 他: 老年看護学療養病院実習における指導者の自己評価 ECTBによる評価, 初年度と2年目の比較, 日本看護学会論文集 看護教育, 40, 176-178, 2010.
  - 20) グレッジ美鈴, 宮本千津子, 田中克子, 他: 看護技術教育 プログラムの再構築と実践 臨地実習における看護技術の習得に関する研究, 看護展望, 30(6), 720-726, 2005.
  - 21) 和田由紀子, 上田加寿子, 八尋陽子, 他: クリティカルケアに対する看護学校の教育の現状と実習病院の期待, 九州国立看護教育紀要, 9(1), 25-35, 2007.
  - 22) 横井和美, 竹村節子, 沖野良枝, 他: 病院・大学連携における実習指導に対する取組み 実習指導者と連携した成人看護学実習直前の技術チェックに対する学生からの評価, 人間看護学研究, 7, 43-52, 2009.
  - 23) 渡邊江利子, 荒木清美, 坂本淑江, 他: 実習指導者と学校との連携を目指した研究会の成果 指導者が学内で体験する筋肉内注射の技術チェック, 九州国立看護教育紀要, 10(1), 16-23, 2008.
  - 24) 嶋根久美子, 額額美保子, 榎本康世, 他: 看護基礎教育における学内技術演習の検討 模擬患者への基礎看護技術演習の効果, 日本看護学会論文集 看護教育, 36, 12-14, 2005.
  - 25) 金子吉美, 鈴木妙, 久保かほる, 他: 成人看護演習における看護師と教員の技術評価の特徴, 日本看護学会論文集 看護教育, 37, 383-385, 2007.
  - 26) 表五月, 谷本恵理, 高島佐代子, 他: 母性看護学実習における実習指導者のかかわり学生カンファレンスと学生の学びから考える, 香川県立保健医療大学紀要, 1, 141-145, 2005.
  - 27) 川上佐代, 古川明美, 大原幸子: 神経筋難病病棟での成人看護学Ⅳ(終末期の看護)における学生の学びの分析, 中国四国地区国立病院機構・国立療養所看護研究学会誌, 3, 257-260, 2007.
  - 28) 奥田真由美, 橋本笑子, 尾崎洋子: 神経難病・筋ジストロフィー患者看護の指導方法の工夫による学生の学びの関連 実習終了ふりかえりレポートからの分析, 中国四国地区国立病院付属看護学校紀要, 4, 58-77, 2008.
  - 29) 宮長邦枝, 逸見英枝: 倫理的感性を育てる看護学実習 成人看護学実習における一学年の実習内容を振り返って, 臨床看護研究, 11(1), 38-44, 2004.
  - 30) 鈴木朝子, 松山協香, 田崎優子: 臨地実習における実習指導者の学生への関わり 学生の行動計画発表場面から得られた実習指導者の実態, 日本看護学会論文集 看護教育, 36, 221-223, 2005.
  - 31) 伊藤まゆみ: 学生の経験を成功体験につなげるための臨地実習指導者の関わり, 神奈川県立保健福祉大学実践教育センター看護教育研究集録, 37, 132-139, 2012.
  - 32) 石田清美, 久保木三喜子, 河合節子, 他: 基礎看護学Ⅱ期実習前, 実習後の不安・緊張への意識調査 アンケートをとおして意識の変化をみる, 旭中央病院医報, 23(1), 11-13, 2001.
  - 33) 杉谷かずみ, 芳田章子: 痴呆患者の看護における看護学生の困難感の検討, 日本看護学会論文集 老年看護, 33, 211-213, 2003.
  - 34) 嶋田美香, 久原佳身, 石橋富貴子, 他: 学生が認知症高齢者と接するときを感じる困難感の内容とその

- 対処行動, 九州国立看護教育紀要, 9(1), 8-14, 2007.
- 35) 矢野順子, 藤本二三代: 基礎看護学実習生の実習満足感調査, 日本看護学会論文集 看護教育, 37, 434-436, 2007.
- 36) 竹内美千代, 山田さか江: 看護学生の臨地実習における実習満足感と自己効力感との関連性, 長野県看護研究学会論文集, 30, 82-84, 2010.
- 37) 江原真紀, 澄川幸恵, 鈴木利枝: 教育理念や方針の違いによる実習指導者の戸惑い・困難, 精神医学研究所業績集, 42, 97-99, 2006.
- 38) 石崎邦代, 池田正子: 臨地実習指導者がかかえている指導上の困難とその支援 実習指導者へのアンケート調査より, 日本看護学会論文集 看護教育, 38, 228-230, 2008.
- 39) 原田恵子, 持田容子, 片山弥生, 他: 看護系大学生の臨地実習に初めて関わった実習指導者のとまどい, 日本看護学会論文集 看護教育, 42, 72-75, 2012.
- 40) 山根美智子, 渡邊カヨ子: 急性期病院における看護学生への実習指導に対する看護師の思い, 獨協医科大学看護学部紀要, 5(2), 61-73, 2012.
- 41) 佐藤好子, 佐川朋美, 後藤文子, 他: 精神看護学実習に対する実習指導者の意識, 茨城県立病院医学雑誌, 22(2), 91-98, 2004.
- 42) 金子美香子, 鈴木のり子, 菅野寿美子: 臨地実習指導者の指導に対する意識 やりがいと関心度, 自信度, 負担度の関係, 日本看護学会論文集 看護教育, 36, 227-229, 2005.
- 43) 井上留実, 三重野英子, 末弘理恵, 他: 実習指導者の実習指導に前向きに取り組むための課題 実習指導の原動力となる思いを通して, 日本看護学会論文集 看護教育, 41, 49-52, 2011.
- 44) 箕輪千佳, : 新規に看護学実習を受け入れる実習指導者の情報ニーズと大学への期待, 佐久大学看護研究雑誌, 1(1), 3-11, 2009.
- 45) 山田聡子, 太田勝正: 看護教員が期待する臨地実習指導者の役割 フォーカスグループインタビューに基づく検討, 日本看護学教育学会誌, 20(2), 1-11, 2010.
- 46) 橋本笑子, 加藤かすみ, 伴藤典子, 他: 新人看護教員の講義、実習、生活指導で困っていることの実態, 中国四国地区国立病院附属看護学校紀要, 7, 105-112, 2011.
- 47) 井ノ上ルミ子, 青崎奈美, 仲尾左木子, 他: 実習調整者の役割検討, 看護実践の科学, 37(2), 62-65, 2012.